

2019年

4月10日

第325号

ゆうあい通信

発行所 石井記念友愛園

宮崎県児湯郡木城町椎木 644 番地 1

〒884-0102 TEL 0983-32-2025

気淑(よ)く風和(やわら)く

園長 児嶋 草次郎

新しい元号(年号)が「令和」となりました。私がこのニュースを聞いたのは、岡山高梁市内でしたが、「平和を命じる」みたいな感じで、その時は違和感を持ちました。宮崎に帰って新聞を読んで、ようやくしっくりとなじんで来ています。

出典は万葉集で、730年に大伴旅人が大宰府で梅花の宴という歌を詠(よ)むための宴会を開いた時、たぶん挨拶(万葉集では序文)から取られたということです。

「初春の令月にして、気淑く風和ぎ」云々。新聞の解説では、「新春の好(よ)き月、空気は美しく風はやわらか(中西進「万葉集」)という意味だそうです。中国ではなく日本の古典からの引用は初めてとか。

明治大教授の斎藤孝氏は、「すがすがしく和らいだ心でもう一度一つにまとまって、格差を少しでも是正し、ギスギスした社会を変えよう。そして、文化的にも豊かな時代にしていこう。そんな願いが込められているのではないか。」と感想を述べられていました(読売新聞4月2日付)。

また、国文学者の辰巳正明氏は、「令和では、和が非常に重い意味をもつと思う。聖徳太子の十七条憲法の『和をもって貴しとなす』に返っていくともいえる。和であることによって日本がこの千数百年生き延びてきた、改めて和というものを考え直しみんなで大事にしなければならないということではないか。」とその意義を強調されていました。(朝日新聞4月2日付)。

このような専門家の解説を読んでいると、なるほど、日本人としてのアイデンティティをこのグローバル化の時代にもう一度確認する、つまり西洋の価値観に流されず、日本人として、その自然と歴史と文化に誇りを持ち、特にその魂の中心にある「和」の精神を大事にして、これからの時代を生きていこうじゃないか、そんな風に呼びかけられているようにも感じとれ、新鮮な気持ちになれます。

万葉集が編集された時代から、すでに1000年以上の年月がたっているのに、時空を越えて当時の日本人たちの感性が想われます。必死に大陸文化から学び、律令国家建設に燃えていた頃です。文化や芸術も成熟し、日本国としての矜持(きょうじ)と誇りも獲得しました。ちなみに古事記や日本書紀が編集されたのもこの時期

でした。

当時は、梅の花が咲く頃が「気淑く風和ぐ」時期であったようですが、暖房になれてしまっている現代人の私たちにとっては、その頃は少々寒く、この桜の咲く頃こそが、空気も清く感じられ、風もやわらいだ雰囲気です。子供たちの気持ちも、新学年、新入学を迎え、少々清冷な緊張感に包まれています。

ここでようやく本題です。この「友愛通信」は、支援者の皆様、関係者の皆様への現状報告が主な目的ではありますが、私の思いの中には、20年後30年後（私がこの世にいなかった後）の後輩たちへの友愛社文化の伝承の必要性を感じる部分もあり、この歴史的に大きな節目で立ち止まってしまいました。

今回は、「高校生自覚旅行」について書かせていただきます。毎年この時期に行う高校生と職員だけの2泊旅行、今年は岡山孤児院発祥の地を巡る旅でした。3年に1回は必ずこの地を訪ねることにしているので、高校3年間の間に1度はこの石井記念友愛社の原点に立ち、自分たちの価値のルーツを確認することになります。言わば魂の故郷を訪ねる旅です。

児童は今年入学する4名を含めて高校生11名、それに私を含めて職員5名、総勢16名。3月31日（日）、朝5時すぎに貸切りバスで出発しました。石井十次の「旅行教育」に習う行事で、単に美的観念を身につけるだけでなく、鹿児島島の「郷中教育」のように集団生活を引っぱるリーダーとしての自覚を養成するという願いもこめられています。それで「高校生自覚旅行」なのです。特に男子グループは、この1年間、中学生たちのエネルギーの逸脱にさんざん振り回されて来ましたので、2名の新生を含めて4名でしっかりまとめてほしいと、出発前に話しました。

高速道路を北上し、6時すぎ、左に延岡の九州保健福祉大学を望みながら、右の日向灘から登るまばゆい太陽を遥拝。大分との県境の山々の自然林には、山桜が満開。これらは、山鳥たちがその実を食べて種のまじった糞をばらまき増やしていったもので、限りなく続いています。みごとです。

臼杵から四国の八幡浜まではフェリーで、2時間20分ほどの船旅です。それぞれバスから降りて思い思いにすごしました。私はカバンに入れていた「古事記」の解説本を時々開きながら、あれこれと考えを巡らしました。

先ほどの九州保健福祉大のアキヒコ君とアサミさんは、無事に3月19日に卒業しました。二人とも優秀で、「社会福祉士」の国家試験にも合格。特にアキヒコ君は、ボランティアを含めて総合的に優秀だった卒業生1名に大学からの要請により石井記念友愛社から「愛の十次賞」を毎年贈呈することになっているのですが、今年はその受賞者に選定され、私自身から直接手渡すことができました。全く想定してなかったことで、私にとってこれ以上にうれしいことはありませんでした。

2歳で彼と出会い、20年間、色んな職員が彼と関わり導き、祖父母にも支えら

れ、そして大学に入学しても多くの先生方、友人たちに守られ指導を受けた結果として、現在の彼がいるのでしょう。もちろん彼が自分の力で身につけた価値観と志が彼をここまで大きくしたと言えるのですが、私は、これら 20 年の結実すべてを包括して、日本の利他的和の福祉文化が生み出したものとしてとらえています。

個人主義・合理主義の欧米の文化ではやり得ないことです。悲しいことに、今その文化に日本の社会的養護は侵されようとしており、戦っていかねばなりません。

まだ九州保健福祉大には 6 名が在籍しており、今春はさらに児童養護施設とは別ルートで縁の出来た女の子 1 名が入学します。今の高校生の中にも大学進学への志を持っている児は何人もおり、また、この奨学制度の枠を他の施設にもひろげていきたいという私自身の願いもあり、今後彼らをいかに支えていくのかということが大きな課題です。支える体制を確立しなければならないのです。一番良いのが「自立援助ホーム」という制度化されたシステムを導入することです。

これは神の導きでしょう。3月に大阪の弁護士を通して、古い卒園生が遺してくださったまとまったお金を拝受することができました。いわゆる「遺贈」です。そのお金で延岡市内に家を購入し、学生アパート（自立支援ホーム）にできないものかと考え始めています。その方のお名前をいただいて「みなこの家」としたら、天国のその卒園生の遺志に報いることになるのではないかと思案しているのです。今、日本の児童養護施設が一番力を入れなければならない部分は、こういう自立支援ではないかと私は考えているのです。

そう言えば、石井十次の「帰国途上の所感」（明治 27 年）は船の上で考えたものでした。あの当時は、小さな船で岡山と宮崎を往復していたのです。広大な太平洋を眺望していると心も広がります。

そんなことを考えているうちに、四国の八幡浜港に到着。満開のソメイヨシノ桜を車窓からながめながら、また高速道に乗り、一路岡山へ向けて走りました。倉敷には午後 3 時すぎに到着。いつものように大原美術館に入館し、世界の絵画と対話。思春期真っ盛りの子供たちの感性をみがくには最高の体験です。2 時間ほどじっくり芸術品を鑑賞した後、私たちは宿舎であるユースホステルに向かいました。

2 日目（4 月 1 日）、私たちはまず、岡山孤児院発祥の地、岡山市内上阿知の大師堂と診療所跡地を訪ねました。石井十次が医学の実習期間中に、貧しい母子に出会い、その息子前原定一をあずかった場所です。石井記念友愛社にとっては原点（ルーツ）であり、聖地です。

実は、この日巡礼することは、この地区にお住まいの東森貢さんに電話連絡してあります。東森さんはこの地を守ってくださっているお一人で、昨年、この地区で「石井十次に学ぶ会」を立ちあげられ、石井記念友愛社後援会の「石井十次の会」にも入会してくださった方です。せっかくの機会ですので、友愛園で育ったアジサ

イの苗をみんなで記念植樹することにし、苗 2 本を持参しています。車が混んでいて 30 分ほど予定より遅れて到着。するとなんと、地区の方々 20 数名が集まり歓迎してくださったのです。叶原土筆先生まで来てくださっていました。

叶原先生との御縁は長く、先生が岡山県立成徳学校（自立支援施設）の校長をされていた頃、この自覚旅行で学校に泊めていただいたこともあります。

130 年という長い長い時を超えて、この地が聖地として地域の方々によって大切に守られ、そこに「和」の精神が生き続けているということに感動をおぼえます。記念植樹をすませると、皆さんと一緒に記念写真を撮りました。子供たちが将来に対して夢や希望を抱くためには、自分に対して誇りを持つことが必要ですが、石井十次の理想郷の原点を訪ねることで、石井十次につながる自分たちの生活に誇りを持つようになるのだと思います。

現在、岡山でも 4 人の卒園生が大学で学んでいます。志を持つ子供が育つようになって来たのは、このような人と人との出会いを生み出す旅行教育の積み重ねの結果でもあろうと思います。宮崎に帰って書いた感想文の中でユウカ（高 3）とスズカ（高 2）は次のように書いていました。

「私達が十次先生の意志をくみとるとともに、それを宮崎の地で受け継いでいくこと、これこそが今回私達が、大師堂を訪れた意味だと思います。」（ユウカ）

「私達は診療所跡に行き、記念碑を見て植樹をしましたが、それには深い意味が込められていたと思います。それは、石井十次先生がああ場で一人の少年を預かなければ、今の友愛園は存在してなかったかもしれないということです。私達は、ああ場に立ち、石井十次先生の存在を今までより深く思い知らされました。また、地域の方々大切に守られているということからも、十次先生の偉大さを感じずにはられませんでした。」（スズカ）

その後、私たちは、岡山市内にもどり、児童養護施設新天地育児院内に移転して保存されている当時の小舎制の園舎を、園長の梅里様の案内で見せていただき、岡山孤児院のあった門田屋敷の三友寺門周辺を車窓からながめ、岡山理科大学と高梁市の吉備国際大学に向かいました。先ほども書きましたが、現在理科大には卒園生が 2 名、吉備国際大にも卒園生が 2 名在籍しており、後に続く後輩たちのために、今回はコースの中に入れました。4 月 1 日は辞令交付日であり大変忙しく、御迷惑をおかけすることになったのですが、快く応じていただき感謝でした。

両大学とも石井十次記念奨学金制度を作ってくださいっており、子供たちの進学が可能となったのです。理科大では、モモタ君とレツガ君が門の前で待っていてくれました。広報室長の吉村様が案内くださり、子供たちも興味深く聞き入っていました。

午後に訪ねた吉備国際大では、リオナさんと合流し、入試広報室の原田様が案内

くださいました。両大学とも山の中腹にあり、岡山市内、高梁市内を一望でき、視野の広い学生が育つだろうと感じ取ることができました。

そして、夕食には、その大学生4人をユースホステルに招待し、職員、子供たちと楽しく歓談。子供たちの感想のいくつかは以下のとおりです。

「自分が学校や園の学習時間でやる気を出さないという問題を相談したら、大学生達からとても的確なアドバイスをもらうことができたので良かったです。卒園生の方々も生き生きとしていたので、より一層大学への関心が増しました。」

(ヨシヒロ高2)

「卒園生との食事会では、大学に行くことのメリットや、今まで先輩たちが何をやってきたかを聞いて良かったです。私は進学を考えているので、とても良い体験が出来ました。」

(タクマ高1)

「大学生との食事会では、とても充実した時間を過ごすことができました。自分に自信が持てたので、今回の自覚旅行は、とても良い時間を過ごせたと思いました。」

(レイナ高3)

4月2日に岡山から帰って来て、バタバタと日がすぎています。10日には新高校生たちも登校を始めました。これから、日々の生活と学習を積み重ねながら、まず生活習慣をしっかり確立させ、未来を開く修行に取り組んでほしいと願っています。多くの支援者の皆様には、色々と御迷惑をおかけしますが、また1年、御指導・御支援くださいますようによろしくお願い致します。

今園内は、八重桜、ツツジも咲き始め、木々の若葉も萌えたち、大地から吸いあげたエネルギーをこの空間に発散しています。私たちもそのエネルギーとこの和らいだ空気をしっかりと吸いこみながら、気合いを入れなおして新しい年度を歩み始めています。神武の時代から永々と続く人づくりに、先人たちの残してくれた文化とこの大自然の力を借りなが肅肅（しゅくしゅく）といそしみたいと思います。